

サランの戦士 ~ Little Hero Paradise ~

オープニングジャーナル

“季節外れの異邦人”

Written by 秋山真之 & 美神弘貴



お知らせ :このページ (ジャーナル表紙)に入るイラストをイラスト投稿掲示板にて募集中。

サランの戦士 ~ Little Hero Paradise ~

● 季節外れの異邦人

季節外れの白い蝶。いいえ、あれは雪の一片。窓に流れる雪の影。もう直ぐやって来るクリスマスの歌が、街に流れる頃。

「ほ、待ちなさい。 ま、待って！」

御厨蜚は走っていた。

「だって、転校生がやって来るんだもん」

蜚は、絶対友達になろうって決めていた。普通は学期末も押し迫ったら、休み明けまで待つものだ。友達も出来ないうちに冬休みなんて可哀想。昨日、そう先生も言っていた。

瑞穂小学校の名誉に掛けても、そんな事をしちゃいけない。

心が加速すると、足も、つい加速してしまう。あっと間に集団登校の列を引き離し、疾風のように駆けて行く。そして、みんなより一足お先に校門を潜る。教室にランドセルを置くなり、急いで、来客用の玄関へ。

（あ、あの子だ）

随分と甘えん坊さんみたい。普通は、お父さんかお母さんのどっちしか来ないのに、二人とも一緒に入ってくる。なんだか大人しそうな子だなあ。蜚は息を殺して物陰から眺めていた。

「えーと 久保田香織ちゃんね、今日からよろしくね」

戸島先生が、香織の目線で挨拶をする。香織の後ろには両親の姿。

「では、香織をよろしく願います」

そう言って、深々と頭を垂れる。

「あの 先生、くれぐれもよろしく」

両親の必要以上の懇願には、前の学校での一件に関して必要以上に気にかけているから出るが、それは娘の為ではなく、己の世間体、風評の為。

「だから、本当にあなたは魔法が使えるんだってばあ!!」

そんな声が耳に入ってくる。

「すみません、騒がしくて」

苦笑する担任。

なんでも、魔法が使える、とかで先生に食いついている生徒がいるらしい。

名前は花園くるみ、と言ったか。

そんなこんなで、久保田香織の新しい生活が始まった。

● 瑞穂小学校

「はい、みんなこっち見てえ〜」

先生の隣で小さく身を固めながら、そして周りにいる、これからしばらくの間ついて回るであろうクラスメートの視線を感じている少女。

「今日から、このクラスの仲間になる、久保田香織ちゃん。さ、みんなに元気良く挨拶しようね」

「く 久保田香織です」

香織はそれが精一杯だった。

「香織さんは、お父さんの仕事の関係で、今月から引っ越して来ました」

まあ、表向きの理由としては妥当である。

「じゃあ そのこ、席。香織ちゃんの席はあそこにするね。じゃ、席について」

クラスの全員の視線が香織に集中する。

転校する前の学校での記憶がまだ鮮明に残っている香織には、その視線も恐怖を少なからず感じていた。

全員、知らない顔。それもまた怖さを増している。

「達彦君、今日は香織ちゃんに教科書を見せてね。香織ちゃん、まだ教科書を持ってないから」

香織の隣に座っていた鋼達彦が、コクリと頷く。

「そう言えば、達彦君も転校してきたんだよね。出来れば香織ちゃんに何かあれば教えてやってね」

達彦が返答しようとしたとき。

「女と仲良くしてー」

そんな声が入る。

良くなるタイプである。

とかく子供の頃、特に小学生の高学年では、大抵の場合は男子と女子で何かと騒ぎが起き易い。

当然、その理由は非常に些細であり、理由なんぞ皆無に等しい。

「こら、転校したばかりの香織ちゃんを苛めないの!!」

「だって、仲良くしてるじゃん」

大人の感覚では到底理解できない理論展開ではあるが、それが子供の世界 という事しておこう

そんな声には気にも留めずに、1時間目の授業である算数の教科書を机の上に出す達彦。

「また、会ったね」

そんな言葉が達彦の口から漏れる。

声には出なかったが、達彦の声に驚き、思わず目を向ける香織。

偶然、目と目が合い、慌てて俯く。

「偶然じゃない? どうしたの?」

別に他意はない。純粋に疑問に思っただけである。

子供である無垢さ故に、大人では聞けないような事も聞いてくるし、それに気づかされる事も少なくない。

「何でもない」

サランの戦士 ~ Little Hero Paradise ~

暫しの沈黙。

「めんね」

香織から話し掛けられ、ちょっと驚く達彦。香織と達彦、転校生ではあるが、実は同じ学校からの転校であった。

達彦が転校した理由は少なからず、香織にも原因があった。いや、この場合、『原因』と言ってしまうと香織に非があるように聞こえてしまう。

以前の学校で苛められていた香織を庇った唯一の味方が達彦であったが、それは同時に達彦も苛めの対象になる事だった。

達彦も以前は苛められるだけの立場であったが香織を連れていたのは、苛められるだけでは、そのうち殺される』と思ったとき、手段を選ばない反撃に出た事である。

結果、過剰な反撃がPTAでも問題となり、転校を余儀なくされたのである。

しかし、その事は達彦は後悔していなかった。

まあ、達彦の両親は相手の両親宅周りに相当の労力を費やしたらしいが。

「大丈夫だよ、ここには苛める奴はいないし、また守ってやるよ」

その瞬間、教室内がざわついた。

転校生がいるので、改めて確認します。ノートの新しいページを開いて日付を書きなさい。そして、今日習う教科書のページを見開きの左上に書きます。158ページと書きなさい。おさらいから」

香織を意識してか、先生はいつもよりゆっくりのペース。手早く済ますおさらいも、今日は時間を掛けている。解説図の下にさらに文章で

【式】

3と5分 2引く、1と5分の 3は。

【補助計算】

・3と5分 2引く、1と5分の 3は、分数の位、5分 2く、5分の 3は、引けません。

・3は、2と1。1引く5分の 3は、5分の 2。

・5分の 2たす 5分の 2は、5分の 4。2引く1は 1。

合わせて、1と5分の 4。

【答え】

1と5分の 4です。

先生に続けて読みましょう。読めない漢字には読み仮名を振りなさい。式、3と5分 2引く、1と5分の 3は。補助計算、3と5分 2引く、1と5分の 3は、分数の位、5分 2引く、5分の 3は、引けません。3は、2と1。1引く5分の 3は、5分の 2。5分の 2足す 5分の 2は、5分の 4。2

引く1は 1。合わせて、1と5分の 4。答え、1と5分の 4です。』

2時間目の授業が終わり、15分の長めの休み時間。大抵の生徒はその短い時間でも外に出て遊ぶ。というのは昔の話で、今はカードゲームで遊ぶものや、最近多くなってきている学校内備え付けのパソコンでインターネットを見るものが増えている。

まあ、それでも外に出ている生徒の方が圧倒的多数なのは変わらないが。

しかし、今日は様子が違っていった。

今も昔も、転校生』には興味はあるらしく、どんな子が入ってきたのが、いやそれ以上に気になるのは『男』なのか『女』なのかが気になる。

隣のクラスに転校生が入ってきたらしいぜ。』

男？ 女？』

そんな会話は1回はする筈である。

そして、今は、その確認作業の為、香織のクラスの出入り口に他のクラスの生徒が異様なまでに集っている。

「気にしないでいいよ、あんなの」

達彦は、じっとして椅子に座っている香織にそう声をかける。

と、そこへ。

「ねねね、今日からウチに来るの？」

馴れ馴れしく、香織に話し掛けてきたのは矢野竜彦である。

見た目の良さ、そして温和な性格が受けて学校の学年を問わずに女子に人気のある生徒である。

しかし、最近はその人気をうまく利用して調子の良い奴。という話も流れている。もちろん、こんな噂はもてない男子のやつかみだろう。

「いきなり話し掛けてくるのは止めたほうが良いと思うけど」

「君には関係ないよ」

そう言って、軽く受け流す竜彦。

「お前はオバサンが似合っているんだよ」

そんな声が外野から飛んでくる。

最近、巷で竜彦が同じ学校の女子だけではなく明らかに年上の女性とも一緒に遊んでいる所が目撃されている。

まあ、御歳 10歳という年齢から考えれば中学生以上は十分『オバサン』の範囲に入ってしまうのだが。

「何も知らないんだよ、止めとけてっ」

そう言って達彦が庇う。

サランの戦士 ~ Little Hero Paradise ~

確かに、香織はさっきから竜彦に視線を合わせようとしていなかった。しかし。
「こっち見てよ」

その竜彦の言葉に不思議に逆らえなかった香織が竜彦と視線を合わせた時。

『？ 見たことある？』

あれ？ この子 覚えている？』

そんな2人の様子が変に感じていた達彦であった。

掃除も終わり、今日の4年生は下校の時間である。外では下校する生徒に混じって、5時間目以降も授業もある5、6年生の姿もある。

ランドセルを背負って、達彦と下校する香織の前に現れたのは近藤あるくであった。

「なんだよ」

あからさまに敵意を出す達彦。

しかし、あるくはそれを意に介さない。どうやら、香織の方にしか眼中にないらしい。

「なあ、後で一緒に帰ろう」

「止めろよ」

そう言って、2人の間に入る達彦。

しかし、腕っ節の強さはあるくの方が上である学年も2つ上で、しかも柔術の稽古も受けている。かなう訳がない。

2人は、香織が引っ越ししてきて、家族で世話になる自治会に挨拶に行ったときに知り合っていた。

同じ自治会グループであった。

「関係ないだろ」

「同じ帰り道なんだよ、悪いか」

そう言って、達彦が勝てる見込みのない喧嘩を始めようとしたとき。

「先生!! あそこで喧嘩が始まってます!!」

そんな声が聞こえていた。

達彦は、強引に香織の腕を引っ張って行ってしまった。

あるくは追いかけてようとしたが、大人である先生を相手にには出来ない。

「こら、あるく君。5時間目の授業が始まるから早く教室に戻りなさい!!!」

あるくは、先生の声に従うしかなかった。

そして、その視界の端に1人の女子の姿が入っていた。

● 美しい時

近くのコンビニエンスストアの前で、達彦と香織の2

人の姿があった。

少し息を切らしている所から見ると少し走ってきたようである。

2人は、息を整えるとお互いを見合わせると少し笑みがこぼれた。

「大丈夫だった？」

突然、声をかけられた。

さっき校門の前で先生を呼ぶ声と同じだった。

「感謝してよ、私のこと」

御厨堂であった。

学年が同じである為、香織達と同じ4時間授業であった事が幸いした。

堂と達彦も同じ自治会である為、面識はあったが、それ以上の何かを最近を感じている事も事実だが。

もっとも、恋愛とは程遠いものだが。

「あいつ、感じ悪いから止めといた方が関わらない方がいいよ」

堂の忠告に黙って頷く2人。

「なんか、最近はお島とかと遭り合っているみたいだし」

その名前を聞いた達彦は寒気が走った。

お島翼は、あからさまなまでのヤンキー予備軍で学校からも要注意生徒とされている。今では族相手でも対等以上にやりあっているらしい。

ここだけの話だが、小学生にのされたなんて、恥もいらいとどこから表沙汰にはなってはいないだけの話だ。中には病院送りになった特攻隊長もいるとか。

話半分に聞いても、そんなの相手にして勝てる見込みはない。

「ねね、これから一緒に遊ばない？」

堂からの突然の申し出。

まあ、子供の話に脈絡を求めるほうが悪いのかもしれないが。

「そうだね、まだ知らないんだよね。こちら辺の事」

達彦もそれに賛同すると。

「うん」

香織もコクリと頷いた。

「あー。いたいた」

自治会グループの仲間が、集まってきた。友達のいないお休みなんて詰まんない。誰もが香織の事を気遣っている。

「あのね。香織ちゃん。もう直ぐ冬休みだよ。香織ちゃんもこの街のこと大好きになって欲しいから、いろいろ案内してあげるね」

入れ替わり立ち代り、いろいろと話し掛ける。

「うん」

香織は、少しはにかむ様に頷く。

サランの戦士 ~ Little Hero Paradise ~

「じゃあ、どこから話しようか」

「そうね。あの山の天辺に天文台があるの。ちょっと怖いお爺さんだけど、昔彗星を発見して、名前を付けたりしてるんだよ。今度遊びに行きましょうよ。月とお話できるよ」

瑞穂町は星が綺麗な街だ。冬の済んだ真夜中の空だと、目の良い人ならミザル、北斗七星の八番目の星が見える。

「あのさ、今はあんまり使われてない公園なんだけど、そのブランコがこないだから6時になると風も無いのに揺れたりとまったりするんだぜ。現代に甦った妖怪が、あの公園に住んでるんだよ」

その公園はもう使われなくなった社宅付属のもので、今は殆ど使われていない。生垣に囲まれた小さな児童公園。

「ねえ、初詣に学校の裏山の神社に行かない。結構人来るから、縁日みたいなのもでるんだよ。毎年、いろいろ珍しい品物が買えちゃったりするの」

「そんなことよりさー。今度できた光星デパートに、優ちゃん来るんだよ。サインして貰わなきゃ」

優ちゃんとは売りだし中のユニット、レピッシュのヴォーカルだ。プロデューサーの仕掛けで、男の子と女の子とも分らない、中性的な魅力で人気上昇中。まだ小学生と言うことなので出演時間帯に制限があるが、最近は良くTVで見掛けるようになって来た。

無条件の好意に少しだけ、香織の顔に笑顔が戻ってきた。

「優ちゃんのチケット、貰えるよ」

「えー！ 本当」

「パパのお仕事の都合で」

「やったー！」

この笑顔から、物語は始まる。

● テコ

綱 達彦の家は校区の端に有る。みんなと分かれて少し近道。今は使われなくなった社宅マンションの敷地を抜けて行くのだ。ふーん。あれが妖怪ブランコか。一瞥して通りぬけようとした時。達彦は自分を同う存在に気がついた。

「だれですか？ こんな子供に大の大人が大変ですな」

声に、物陰から金髪剃り込みの行っちゃった男が現れた。夏頃に高校を中退したばかりの奴だが、小学生の達彦から見れば、立派に大人だ。

意識して、達彦は怒りを煽るようにニヤリと笑う。笑ってさらに駄目押した。

「止みなさい。私は『強い』ですよ」

振りかえりざまに吐き捨てる言葉。倍近い上背を持ちながら、金髪の剃り込み男は達彦に気押されていた。

「止めますか。それが正しい判断です」

「こんガキ！」

拳の届きそうな至近距離から、男は礫を投げて来た。族の抗争に参加して、今まで何度も相手を血祭りにして来た必殺技である。子供にこんなものを使うのは、彼がマジ切れの証拠だ。

そして、外すまでもない必殺の一撃が達彦の顔面に視界外から見られる。狙い違わず、礫は達彦の頬に吸い込まれ奥歯を碎いて血飛沫を上げた。

「させるかぁ！」

否、そう見えたのは幻だったのかも知れない。一瞬の閃光と共に、礫は達彦をすり抜けるかのように通過し、代わりにとんぼを切りつつ放ったオーバーヘッドキックが男のわき腹をえぐる。

「う」

信じられないことに一撃でうずくまり悶絶。

「ふ、ザマネえや。やっぱり貴様もバスターなんだな。しかも相当使いなれてやがる」

社宅マンションの屋上には、いかにも趣味の悪い服の主。そいつはひらりと電柱の倍はある高さから達彦の傍へ舞い降りると、あごをしゃくって言った。

「どうだ、この翼様のテコにならねえか」

「テコ？」

専門用語じゃ意味が通じ無い。

悪いことは言わん。俺の自分になれ」

ふっと鼻で笑う達彦。

「ま、考えておけ。今日は顔見せだけで済ませてやるよ。貴様は絶対にテコにして見せる。まあ良い、もう直ぐかいヤマがあるから、それが終わった後だ。あばよ。また合おう」

翼は、階段を2段飛びに駆け上がるくらい軽やかに、社宅マンションの屋上へ飛び乗り、そしてその影に消えて行った。

● 次回ディヴィジョン選択

B1 妖怪ブランコ (担当 秋山真之)

C1 優ちゃんコンサート (担当 美神弘貴)

D1 初詣の縁日 (担当 尾花沢真次)

E1 山の天辺天文台 (担当 角南一辺)

● お報せ

複数のお話に同時に参加することも可能です。また、

サランの戦士 ~ Little Hero Paradise ~

参加者が居ない話は執筆されないか、次回以降に持ち越しになります。

なお、エランではチームマスタリングが普通ですので、担当マスター以外も執筆が行われる場合がございます。